

詩作における寛容と非寛容

—— 友か敵か？ 16世紀の場合 ——

La tolérance et l'intolérance dans la création poétique :
Ami ou ennemi? au XVI^e siècle

相 田 淑 子

要 旨

中央大学人文科学研究所の研究チームで16世紀における宗教的寛容の問題を扱っている。16世紀後半のフランスは宗教戦争の時代である。君主に近い位置にいた詩人たちの詩作は戦争下でどのように変化したのであろうか。彼らの「友愛」あるいは「敵対」は詩作にどのように現れているのだろうか。本稿では、詩人アンドレ・ド・リヴォドーについて、ロンサールを中心に周囲の詩人たちとの詩的やり取りを考察した。フランスの詩王ロンサールに対し新教徒のリヴォドーが辛辣な詩句で攻撃したのはよく知られているが、カトリックを標榜するロンサールに対し敵対を続けたわけではない。宗教戦争に翻弄されながら、ローマ時代の哲学者エピクテトスの翻訳出版に至るリヴォドーは、友愛を拒むような詩人ではなかった。

キーワード

16世紀, 寛容, リヴォドー, ロンサール, バビノー

はじめに

中央大学人文科学研究所の研究チームで16世紀における「寛容」の問題を扱っている。ここで問題とされる「寛容」とは宗教的な意味の寛容である。16世紀の後半, フランスの「宗教戦争」と言われるこの時期は, 詩作においても宗教問題が大きな影を落としている。詩王と言われたロンサー

ルの詩作も例外ではない。文学史的な観点からは、ルネサンス期の最も美しいカトリックの詩と言われた詩王ロンサールの作品は敬意を払われることが多く、攻撃したプロテスタント詩人は「敵」というレッテルを拭い去れない。しかしカトリックとプロテスタントの対立は、個人の信仰や信念に基づくというよりは、為政者たちの政治的な対立と絡み合い複雑化した。領主の宗教は領民の宗教であり、宗教を選ぶのは個人ではなく詩人として例外ではないのはこの時代の特徴である。16世紀後半、時代に翻弄された詩人たちは自分たちの立ち位置と詩作の間に、宗教的な揺れや躊躇いそして葛藤があったことは想像に難くない。残された詩作品の中から汲み取ることのできる範囲で、詩人たちの「友愛」あるいは「敵対」の詩作を宗教的な「寛容」と「非寛容」の問題と捉えて考えてみたい。

I リヴォドーの場合——バビノーとロンサール

劇作家、翻訳者としても知られるアンドレ・ド・リヴォドー (André de Rivaudeau, 1540-1580?) は、新教プロテスタントの詩人である。彼の生まれたフォントネール＝ル＝コントは、バ＝ポワトゥーの中心で、バ＝ポワトゥーはポワチエを中心地とするポワトゥーの一部である。広大な地域圏であったポワトゥーは、大西洋沿岸を通して海外との交流も盛んであった幾つかの街と、新教プロテスタントの影響を強く受けてユグノーの拠点となった複数の街を含んでいる。リヴォドーの宗教はこの地域と非常に密接に繋がっていた。中でもアンドレがカルヴァン派の影響を強く受けたのはポワチエ大学で交流のあったアルベール・バビノー (Albert Babinot, 1516?-1569?) という人物である。今日、私たちが目にするのできるリヴォドーの最初の作品も、バビノーの『クリスティアード』 (*La Christiade d'Albert Babinot, Poitevin, A Poitiers, pour Pierre et Jan Moines frères, 1559*) に掲載された作品である。1550年代、著者のバビノーは40代前半だが、リヴォドーはま

だ10代である。両者のやり取りは作品を通してしか知ることができないが、ポワチエ大学で師でもあったバビノーがリヴォドーに寄せた期待は大きかったのだろう。そしてリヴォドーもそれに応えようとした。リヴォドーの手によるバビノーへの称賛は、領主のオノラへの献辞という形をとって、次のように始まる。

我がオノラよ、貴方様にこそ、共通の友人であるバビノーの、同じ船に乗る全ての人々のためにした行いを評価していただきたいのです。なぜなら貴方の判断で承認された場合、他の人がそれを間違っていると判断することはほとんどありえないと思うからです¹⁾。

確かに何事においても領主が決定を下せば下々の者たちはそれに異議を唱えることが難しいが、それを文学作品の冒頭に掲げるのはかなり露骨である。領主が作品を評価すれば他は追随するはずだからという理屈で、10代のリヴォドーは精一杯バビノーの応援をした。持ち上げるために領主にに向けた言葉はかなり打算的にも響くが、さらに「私のバビノーは、並外れた謙虚さを持つ人物で、あの勇者の醜い傲慢さを常に敬遠し……」と続ける。リヴォドーがバビノーを評価する理由の一つに、目障りなロンサール一派の存在がある。プレイヤー派として文学史に輝く彼らの詩を否定したのである。その理由はかなり現実的で、彼らの詩作品が若者に対して悪い影響を与えるからである。それを真面目に訴え続ける。

彼らの乱れた脳が不誠実で邪悪な愛のために考え出した、愚かで下品な夢想をすべて見せることは非常に不謹慎なことであり、これらの酷い様の全てが、彼らの宗教心のなさだという多くの証言もありますし、それを言うことを私は少しも厭いません²⁾。

青少年を保護する目的で有害図書を訴える感があるが、それほどまでに彼らの作品は青少年に対し悪影響を与えたのであろうか。確かに彼らの奔放で官能的な神話的な世界を描き出す見事な作品の数々はここに挙げるまでもなく知られている。ただし古典として教科書的に並べられるような作品と対照的に、ロンサールには低俗な趣味と映りかねない作品がある。1550年代に書かれ出版されたのは周知の事実である³⁾。それが当時どのように受け入れられたのかはまた別の問題となるだろうが、リヴォドーが切実に訴えているのは確かである（以下の下線は筆者による）。

彼らの著書がその証拠であり、疑う余地がないからです。神を畏れるすべての人が感じる正当な悲しみと青少年の美しい心が、彼らの無宗教的な著作から茶番の伝染を受け、絡め取られ、毒されている。私はそう考えざるを得ません⁴⁾。

「無宗教的な著作」から青少年を守るようにというこれだけを読めば教育的配慮のようだが、要は真面目なバビノーの作品を読むようにと領主からも推奨してほしいというプロモーションである。宣伝依頼がリヴォドーの献辞の主題になっている。ここではロンサールの作品に対しては次のように結論された。

だから、見た目はかなり美しくとも見かけ倒しなので、古人の作品に照らし合わせると、ただの水にしか見えません⁵⁾。

古代ギリシア・ローマの人々の作品と比べれば、雲泥の差がある、とりヴォドーは彼らの詩に判断を下した。師である著者バビノーを応援するために、ロンサール一派、「彼ら」の詩作を批判した。これが宗教戦争前の

1559年2月と記されているだけに、リヴォドーのロンサール批判の出発点と考えられる。ただしリヴォドーがロンサールに向ける言葉は、詩作品への批判だけではなく、作者の人格や存在そのものを否定しているような口振りに変わることもあり、自分たち新教徒側の立場を正当化する目的を感じさせる。師バビノーと新教徒の土地の影響なのか。「だからこそ私たちは、ハゲタカが獲物を狙うように司教職や修道院を手に入れるべきだという望みをかなぐり捨ててきたのです」と語る⁶⁾。確かにロンサールにとって修道院や聖職禄を得ることはキャリア形成の基盤だったが、そうした生きた方をキッパリと否定し、「私は彼らに、恥じることなく我がバビノーの足跡を辿り、彼が最初に叩いた地面を叩くことを勧めます」と説いた⁷⁾。

師のバビノーは、ポワティエ大学でローマ法を中心に法学・哲学で教鞭を取っていた。その傍らジュネーヴのジャン・カルヴァン（Jean Calvin, 1509-1564）と連絡を取り合いカルヴァンに尽力するほどカルヴァン派に傾倒した人物でもある⁸⁾。唯一の単著であるこの『クリスティアード』はタイトルこそ『イリヤード』やロンサールの『フランシアード』を連想させるほど壮大だが、キリスト教のソネットやオードを含む一冊の詩集である。同書の作品で、バビノー自身もリヴォドーを讃えている⁹⁾。

夏の盛りに感じる暑さでは、
 気持ちよい涼しさほど私たちを元気にさせるものはない、
 そして心地よい奥深い森ほど
 通行人を留めるものはなかった。
 借金のある者には金子、
 罪を犯した捕虜には罰せられるべき罪の赦し、
 さらに農奴には甘い自由、

これほど嬉しいものはない、
私に追隨する者へ
私の神の不相応な境遇を書くこと、
それ以外のテーマは私の聖なる詩作を楽しませない、
それ以外の話題を君は私から見ることはないだろう、
私のリヴォドーよ、それ以外の愛は私の胸を感動させることはない、
私のミューズは神以外を歌うことは望まないのだ¹⁰⁾。

この詩には官能的な描写は皆無である。たとえ「ミューズ Muse」が登場しても、ロンサールのように詩的着想を詩人に吹き込む神話的なムーサ（詩の女神）ではない。バビノーはイメージの介在を許さないと言っても言うように単なる「詩作」の言い換えとして使う。新教徒プロテスタントのバビノーもリヴォドーも神話の神々の自由奔放で時には官能的な描写を試みることはまずない。清廉なカルヴァン派ということで、真面目で深刻な意気込みは十分伝わってくるが、その反面、面白みに欠けることもある。いずれにしても「私の詩作は神以外を歌うことは望まない」と言う、リヴォドーに向けたあまりに直接的な教示である。

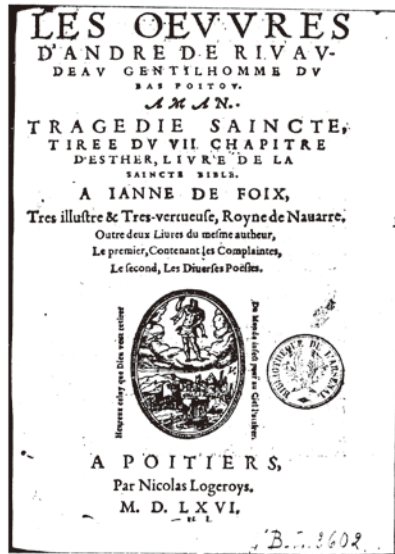
バビノーはリヴォドーの父についても具体的に言及している詩があり、私的にも近い関係が2人にはあったと思われる¹¹⁾。いずれにしてもリヴォドーが出版した全ての書籍に、バビノーの作品は掲載されている。出版の度、相互に確認するかなのような称賛だが、その殆どが、ロンサールへの批判と、カルヴァンやド・ベーズへの賞賛で成り立っている。ここでは詳細に検討することはできないが、リヴォドーの出版物に見られるバビノー関連（バビノー著あるいはバビノー宛）の作品は以下である：

・1566年『作品集』：「アルベール・バビノーからミューズへ、アンドレ・リヴォドーの聖なる作品について」¹²⁾

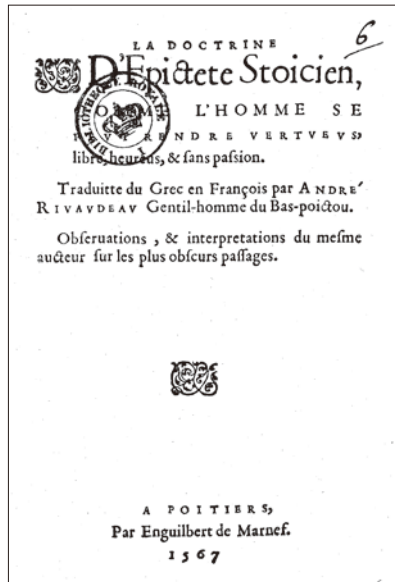
・1566年『作品集』：リヴォドーによる「キリスト教詩人、バビノーへの書簡詩」¹³⁾

・1567年エピクテトスの翻訳：アルベール・バビノー「アンドレ・リヴォドーへの頌歌，エピクテトスの翻訳について」¹⁴⁾

1566年と1567年のバビノーという固有名詞の表記を比べてみると「アルベール・バビノー」から「A・バビノー・ド・ポワチエ」に変えられている。ちなみにリヴォドーは「アンドレ・ド・リヴォドー」から「アンドレ・リヴォドー」に変えられている。「ド」は貴族の称号でもあり、リヴォドーは父親がアンリ2世の宮廷で爵位を得たという理由から途中で家族名に「ド」が入った経緯があるが、この変更では逆になってしまう（図版1、図版2参照）。



図版1) 1566年『全集』表紙 (Bibliothèque nationale de France 蔵)



図版 2) 1567年翻訳書表紙 (Bibliothèque nationale de France 蔵)

そしてこの1567年の翻訳書ではもはやリヴォドーはロンサールの名を出すことなく、エピクテトスに真っ直ぐ向かう。バビノーもこの翻訳書のへの冒頭の詩ではロンサールの名を持ち出すこともない。ただバビノーの「ド」の使い方には違和感が残るが、バビノーについてはここまでにする。

リヴォドーは自作の中でロンサールに対してどのようなリアクションをしているのだろうか。作品を出版年に沿って辿ると、前述した作品以外で、研究者ジャック・ピノーによってリヴォドーの作であると同定された詩がある。1563年の匿名で出された『ピエール・ド・ロンサールの当代の悲惨を嘆くについての王母への訓戒』である¹⁵⁾。これはロンサールの論説詩『当代の悲惨を嘆く』に対する攻撃である。リヴォドーだと推定された匿名の

作者は、極めて過激な攻撃するので、好奇心をもって読まれることも多いようだが、ここでは散りばめられたロンサルへの批判を簡単に羅列してみる¹⁶⁾：

「ロンサルはナンセンス、寓話、歌、汚い恋の物語を堂々と書く術を心得ている。」

「おー、気のふれたロンサルよ、」

「ロンサル、鉄の上の鉄は色あせない、だからといって、あなたの韻が不滅であるとは限らない。」

「正義の味方を気取っているのか、なんという善人なのだろう。」

「ロンサルよ、あなたは力づくで権利を維持していると判断しないわけにはいかない。」……

激しい攻撃は新教徒の敵意からである。だから味方に対しては「ド・ベーズは、恋する人の悲しみを無駄なものと認識したので、それを歌うことをあまり望まない。ヴィーナスやキューピットあるいはその燃えるたいまつ火など抱きたがらない」と清廉さをアピールする¹⁷⁾。

また1565年に匿名で発表された『凱旋』もリヴォドーの作品だと推定する論考がある¹⁸⁾。果たしてこれらが本当にリヴォドーの作であるのか。今後も考察が必要だと思うが、少なくともロンサルに対する新教徒側の攻撃が過激化する有様は「1563年、特に1564年には、ロンサルの敵は攻撃を過激化して、もはやロンサルという人間に対して容赦する気はなくなった」というルージェのまとめが適切と思われる¹⁹⁾。

続いて1566年の『作品集』に収録されたりヴォドーの詩作「キリスト教詩人、A・バビノーへの書簡詩」を見てみる。するとバビノーを賞賛しながらも、ロンサルに関しては見方を変えていることが分かる。批判の対象

はロンサールやその作品ではない。ロンサールに対してリヴォドーは敵意を持たず、むしろロンサールを評価する。リヴォドーが敵意を向けるのはロンサールの周囲である。

あー偉大なヴァンドームの人は
私たち詩に掟を作った、泉の釘としての役割、
なのに百匹の汚い豚が、その鼻でこの聖なる泉を探り、
聖なる場所を汚した²⁰⁾。

ヴァンドームの人ロンサールの偉大さを認め、リヴォドーはロンサールを聖なる泉にふさわしい守り人のように喩える。攻撃の対象でないことは明らかである。攻撃の対象はロンサールの周囲の者たち、ロンサールの作品を真似て失敗した詩人たちかもしれないし、ロンサールの作品を騒がしく嗅ぎ回った者たちかもしれないが、彼らを「汚い豚」とリヴォドーは揶揄した。一匹二匹の豚ではなく、もっと多くの汚れた豚は、宮廷詩人に集団で攻撃するプロテスタント詩人さえ含むかもしれないとさえ思いが及ぶ。

以上、時代に沿って、リヴォドーのロンサールに対する記述を、バビノーを交えて眺めてみた。この10年に満たない期間で、リヴォドーのロンサールに対する敵意が弱まり、そして消えていることは明らかである。非難から称賛へ、敵意から友愛へ向かっているように思う。バビノーとは直接関係はないが、この『作品集』には「レミー・ベローへの書簡詩」も収録されている。この書簡詩はロンサールへの称賛の言葉に溢れている。これは以前に拙稿で提示したことなのでここでは割愛する²¹⁾。さらに同作品集には母、マリ・ティラコーへの讃歌も収録され、ここにもロンサールの名が出されている。ロンサールを批判しつつも認める記述で、ロンサールへの要望を記している²²⁾。

II ロンサールの場合——実益をもたらす宗教

ロンサールについては無数の研究があるが、ここではロンサールと宗教について、と言っても宗教思想ではなく、ロンサールの生活に実益を生み出した宗教との関わりを辿ってみたい²³⁾。生まれながらのカトリックであるピエール・ド・ロンサール (Pierre de Ronsard, 1524-1585) は、メラン・ド・サン＝ジュレ (Mellin de Saint-Gelais, 1491-1558) の役職を引き継ぐ形で、1558年に宮廷詩人の役職に就任した。故人となったサン＝ジュレから引き継いだのは、宮廷詩人のポストだけではなく王室顧問、王室お布施分配僧という宗教に関わる役職も一緒であった。

ロンサールにとってカトリックの役職は、病気のために軍職を諦めた10代後半の時期と深く関わる。病気のために耳が上手く聞こえない後遺症が残ったロンサールは、軍職を諦め聖職に活路を見出す。つまり聖職禄を確保し、位階を上げて出世の道を開く方向である。それまでのロンサールは、軍職に就くために幼少期から馬術や剣術の英才教育を受けたらしい。12歳前後でフランソワ一世の宮廷に小姓として入り、フランソワ一世の娘マドレーヌ・ド・フランス (Madeleine de Valois, 1520-1537) が外国の王 (ジェームズ5世) と結婚した1537年に従者として一緒にスコットランドに渡った。可哀想なことにマドレーヌは病気で早逝するが、次の王妃もフランスの大貴族ギーズ家のマリ・ド・ギーズ (Marie de Guise-Lorraine, 1515-1560) だったのでロンサールはスコットランドに留まり、やがて小姓の任が解かれた後に帰国した。今度は王室侍臣団に入り王室外交官ラザール・ド・バイーフ (Lazare de Baïf, 1496-1547) とドイツに遠征したが、この時の病気がもつて20歳前に宮廷から離脱している。ここまでがロンサールの軍職歴であるが、カトリックの役職に就いても、こうした軍職を目指した経験は人脈を築いていく上でロンサールにとって貴重なものとなった。長年、宮廷でメート

ル・ドテルを務めた父ルイ・ド・ロンサール (Louis de Ronsard, 1469-1544) の影響も無視できない。

聖職は10代後半の若者が父の導きで選んだ道だった。父と共に列席したギヨーム・デュ・ベレー (Guillaume du Bellay, 1491-1543) の葬儀の後、僧となるための剃髪儀式がフランスの都市デュ・マンの司教ルネ・デュ・ベレー (ギヨーム・デュ・ベレーの弟) によって行われている。その翌年、父ルイは死去したが、父の導いたカトリック僧への道が現実的な収入や人脈と結びつき、詩人への道へ有効に働いたことは確かである。

カトリック僧としての再出発したロンサールは実務を行う僧とはならなかったが、パリにある前述の元外交官パイフ邸に居住したり、文学史上有名な学寮仲間(コクレ学院)と切磋琢磨したり、少しずつ詩人としての頭角を現す。軍職を目指していたために20歳という年齢は他の学寮仲間より少し遅れて勉学に加わった形となる。のちに「プレイヤー派」のメンバーとなる学寮仲間のパイフ (Jean-Antoine de Baif, 1532-1589) やデュ・ベレー (Joachim Du Bellay, 1522?-1560) は、前述の元外交官パイフやデュ・ベレー枢機卿という有力な貴族たちの息子や甥である。ロンサールは聖職者なので妻帯はできないが、人脈に恵まれて恋多き詩人として知られていることは指摘するまでもない。人脈はさらに広がり、国王アンリ2世の宮廷とそれを取り巻く貴族たちとの関わりはさらに深まる。極めて強力な庇護者、王妹マルグリッド・ド・フランス (Marguerite de France, 1523-1574)、宰相ミシェル・ド・ロピタル (Michel de l'Hôpital, 1505-1573)、フランソワ・ド・ギーズ公 (François de Guise, 1519-1563)、アンヌ・ド・モンモランシー公 (Anne de Montmorency, 1493-1567) 等々の支持を得た。

剃髪式後が聖職者としてのスタートだが、そこで初めて聖職禄を得て、徐々に幾つかの修道院を譲り受ける形で聖職禄を増やした。30代半ばには、希望していた宮廷詩人という役職に就任し王室お布施分配僧となり、さら

にトゥールのサン＝マルタン教会の参事に就任し、やがてシャトー・デュ・ロワールの修道院の副司祭（archidiaconus）に任命されて、カトリックの位階を登る。もちろんロンサールの聖職禄取得が全てうまくいったわけではない。例えばデュ・マンのサン＝ジュリアン聖堂の司教座聖堂参事の聖職禄は、望んだが手に入らなかった。その事実が21世紀の今でもデュ・マンの街で語られる。

カトリック業界とでも言えるような組織に属したロンサールは、「カトリック教徒」から外れることのない生涯を送った。これは思想的な意味ではなく、業務成績的な意味に近い。修道院の所有数を増やし聖職禄を得ることが、ロンサールの評価を下げるわけもないが、新教徒たちの視線は違った。1562年、カトリックのギーズ公がヴァッシーで新教徒を殺害したヴァッシーの虐殺を期にカトリック貴族とプロテスタント貴族の対立は激しくなる。同じ年、カトリックの聖職禄を得るロンサールは、メヌ地方の戦いでカトリック貴族の先頭に立ってプロテスタントと戦っている。幼少期に軍職の訓練を受けたロンサールが実戦に優れていたとしても不思議はないが、実戦に参加した理由は所有する修道院がユグノーの略奪にあったからで、自衛と、財産回収目的の戦いだった。

「宗教」というものがロンサールにとっては現実的な収入の手段であり、政治家が特定の陣営に属することが多いように、この詩人は宮廷カトリックという陣営に属し、宗教戦争下ではベンで戦った。確かに宗教的な儀式を執り行う必要はなく収入は確約されたが、結婚は神父と同様に認められず、子はいない。最晩年には複数の修道院の遺贈の手続きをし、トゥールにあるサン＝コム修道院で最期の時を過ごしている。サン＝コム修道院はロンサールのお気に入りの住まいだったが、今日では広い敷地と共に資料も充実したロンサールの博物館として公開されている²⁴⁾。

Ⅲ ロンサールとリヴォドー父子

I章で見たように詩作の上では、ロンサールに対するリヴォドーの態度は全体の流れとして批判から称賛へ向かう方向を辿っている。しかし詩作の時期と発表の時期のズレもあるために見ると安定していないようにも感じられるかもしれない。その上リヴォドーの場合はロンサール批判の匿名作品まで彼が作者であると推測される現状がある。批判であれ、称賛であれ、詩作上で「ロンサール」の名をこれほどまでリヴォドーに意識させるのは何故なのだろうか。

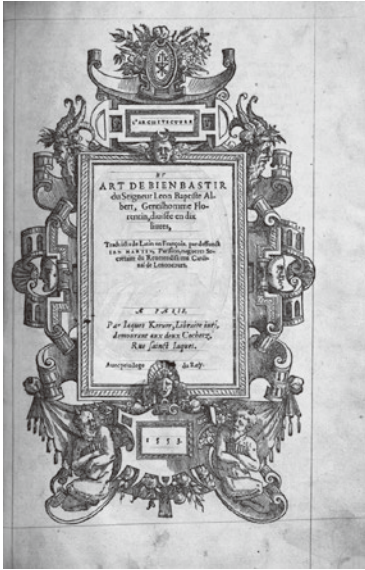
国王アンリ2世の面前でロンサールが酷評を受けたという有名な事件がある(1550)。これはロンサールの最初の詩集『オード四部集』について当時宮廷詩人であったサン＝ジュレが酷評し、これをとりなしたのがミシェル・ド・ロピタルと王妹マルグリットであったといわれた事件だった²⁵⁾。興味深いことに、この『オード四部集』にはリヴォドーの父ロベール・ド・リヴォドー(Robert de Rivaudeau, 15?-1579)が巻頭詩を献呈しているのである。サン＝ジュレが宮廷詩人を務めていた時期にもかかわらず、王室侍従のロベールは、サン＝ジュレではなく、ロンサールへ献呈するソネットを作った。

ミューズ(美神)たち、神々よ、貴方たちの力ある変幻自在な寵愛が、
我らのロンサールを素晴らしい者に変え、
古代を凌駕させた。
神々さえロンサールの手に掛かると、負け知らぬ力を緩めた。
だからロンサールは神々の圧倒的な勝利者
ミューズたちと作詞の圧倒的な勝利者である²⁶⁾。

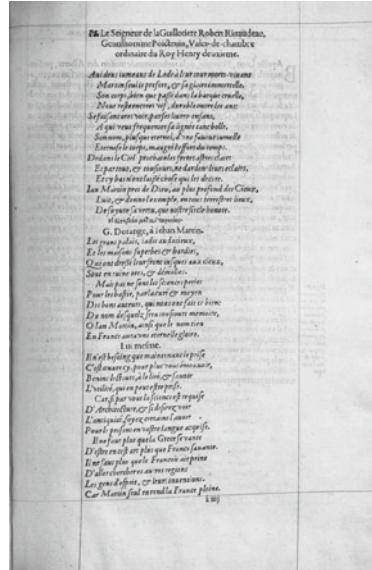
引用はソネットの後半の3行詩の部分である。「ミューズ（美神）たち」と語りかけて、複数の神々を掲げるのは、ギリシア・ローマの神話世界を想起させる。父のリヴォドーが言うには、ロンサルは神々の寵愛で素晴らしい詩人になり、神々はロンサルの詩の中で生き続けることができるから、つまり神々とロンサルはウィンウィンのような関係だという。だからロンサルは神々に称される勝利者でもある。息子リヴォドーが唯一の神、キリスト教の神だけを念頭に置いたのに比べると、父ロベールの詩作はまるで違う。ロンサルへの評価は正反対である。時代的に宗教戦争以前ということもあるが、この時、息子リヴォドーはまだ10代に入ったばかりの頃であろう。1550年代の初めに、ロンサルを神々とミューズと抒情詩の「勝利者」と捉え、将来の詩王を見抜く先見の明が父ロベールにはあったようである。

ロベールとロンサルは、さらに1553年のアルベルティの『建築の書』（ジャン・マルタン翻訳、図版3参照）で、冒頭の献呈詩で肩を並べている²⁷⁾。出版の直前に故人となった翻訳者ジャン・マルタン（Jan Martin, 15? -1553）への哀悼や墓碑銘を含む書籍である（図版4参照）。

ロンサルを讃美し、ロンサルと共に詩作が掲載された父リヴォドーは、詩作品のみならず翻訳も残したが、専らアンリ2世の宮廷で務めを果たしたのであろう。息子リヴォドーの最初のロンサル批判は1559年、パピノーの『クリスティアード』で展開されことは前述したが、その10年ほど前に父ロベールは既にロンサルを称賛していた。アンリ2世の宮廷で王室侍従のロベールとロンサルには、実際のやり取りがあったと考えるのが自然である。そしてロンサルと詩人ロベールの間には友好関係こそあれ敵意の痕跡は認められなかった。父ロベールを介して少年のリヴォドーはロンサルと対面したのであろうか。公的な記録はないが可能性は十分にある。リヴォドーの中で幼少期に感じたロンサルへの友愛や憧憬がやが



図版 3) 1553年翻訳書表紙
(Österreichische
Nationalbibliothek 蔵)



図版 4) 1553年翻訳書
(Österreichische
Nationalbibliothek 蔵)

て敵意に変わり，さらにその敵意が再び友愛に戻ったとも解釈できるかもしれない。

IV 宗教戦争と宮廷詩人

カルヴァンは全ヨーロッパにカルヴァンの宗教改革を拡大したが，彼の母国フランスには100名もの牧師を送りこんだと言われる²⁸⁾。そのひとり为先述のバビノーだったとしても不思議はない。カルヴァンの教理は，「カトリック的な改革思想を物足りなく思っている人ならどんな人でもさっそくひきつけた」と言われるから，フランスのカルヴァン主義は知的な人々を多く惹きつけたのであろう²⁹⁾。リヴォドーに劣らず，レミ・ベローにも改

革派に足を踏み入れた時期があったことはよく知られている。フランスに波及し、根をおろし、中央から比較的遠い地方で、ギュイエンヌ、シャラント、そしてバ＝ポワトゥーで多くの領主が改宗した。ポワチエでカルヴァンは「一つの口となって神に祈れ、そうしておのおのの靈魂とおのおののからだをあげておごそかに神にささげまつるよう」に」と信者たちにすすめたと言う³⁰⁾。プロテスタントとなった領主の領土内はかなり世俗的であった詩人たちの支持を集めたのだろう。リヴォドーについて具体的には不明な点も多いが、少なくともバ＝ポワトゥーと彼のプロテスタントへの傾倒は切り離すことはできない。

アンリ 2 世は抑圧政策を強化し一国家一宗教を理想としたが、不慮の死から宗教戦争までの時間は短い。軍隊をもち、全国のおよび地方的議会や行政機関をも備えた、一国家の形をなすプロテスタント団体の支えもあった。すでに戦争の下地はできていたが、宮廷に追隨するロンサールはプロテスタントに包囲され、身をもって恐怖を体験することになる。

アンリ 2 世の宮廷詩人となりひと時は安定したとしても、王の死の痛手は個人史にも影響する。宮廷詩人は宗教戦争に呑み込まれた。片やアンリ 2 世の寵愛を受けたりヴォドーの父は宮廷を離れた。王侯からの寵愛があってこそその役職である。それは宮廷詩人においても変わらない。15年ほど経ちシャルル 9 世 (Charles IX de France, 1550-1574) の死後、同じようにロンサールも宮廷と距離を取った。

宮廷詩人は御用詩人として王室御用達の詩作をしなければならない。だがフランスでは美辞麗句を使うだけの詩人ではなく、必要があれば王侯に勧告できる詩人が求められた。ロンサールはこの職務を真面目に担当し、幼いシャルル 9 世に向けて詩作した。

陛下、フランス王であることが全てではありません、

徳があなたの少年期を飾らなければなりません。
なぜなら徳のない王など、王杖を持っても虚しく、
手に掛かる重荷でしかないからです³¹⁾。

上記は「いともキリスト教的なるシャルル9世の教育」の冒頭だが、王を育む目的で非常に細かい指示が書かれている。ロンサールにも関わる「聖職禄」についての言及もある。

さて陛下、神を真似なさい、
神が貴方に王杖を与え、冠を授けたのですから。
懇願する者に慈悲を垂れなさい、
狂気で武装した傲慢な者を罰しなさい、
寵愛によって人を高位に付けてはいけません、
それに十分に値した人を選びなさい。
金銭で地位や役職を与えてはいけません。
安易に側近者に空席の聖職禄を与えてはなりません³²⁾。

この詩に「カトリック」という表現は一度も使われない。「カトリックの王」ではなく専ら「キリスト教の王」であることをシャルル9世に求めている。しかし宮廷人にとって「寵愛」は宮廷で生きる術に繋がるし、「金銭で地位や職務」も獲得できる可能性がある。「空席の聖職禄」ならば、ロンサール自身ですら頂戴したい気持ちが皆無ではないかもしれない。しかしロンサールの「教育」は、この点に関して峻厳である。主題に合わせて「教育」の観点で好ましくないこときっぱりと否定し、何よりも理想の君主像を描き出して、幼い王子に人間社会の難しさを180行ほど説き続けた。同時に王国や天下というものの限界もこの詩におり込む。

あらゆる地上の王国は興っては崩壊し、
運命のままに来ては去りゆく、
灯された火ほども続きません、
突然に燃え出し、突然に燃え尽きる³³⁾。

「陛下も人間であることを常に思い起こして」と、王の立場も大胆に確認し、さらに具体的に記述する。

理由もなく戦争や戦闘を企ててはなりません、
ご自身のもの、受け継いだ財産を守りなさい。(中略)
寛大な手で国民を陛下の方へ引き寄せなさい、
そして最も有害な悪とは、
卑屈で強欲な王である、とわきまえてください³⁴⁾。

この詩作品においては、十二分に寛容を備えた王が理想として描き出されている³⁵⁾。この詩は幼いシャルルの心をどのように捉えたのだろうか、少なくとも詩のリズムは心地よく響いただろう。

この詩と同じ1562年、宗教戦争下でロンサールはプロテスタントへの強烈な批判を含む論説詩と言われるジャンルの作品を次々に詩作し、時を置かず公開し続けている。厳しい語調の『当代の惨禍を論ず (*Discours des Miseres de ce Temps*)』236詩行、そして『続当代の惨禍を論ず (*Continuation du Discours des Miseres de ce Temps*)』448行を発表し、12月には『フランス国民への訓戒 (*Remonstrance au peuple de France*)』844詩行が続く³⁶⁾。プロテスタントの攻撃に対抗するため詩作、その背景には宗教戦争の激化がある。新教徒のカルヴァンやド・ベースは名指しでロンサールから批判され、それがさらにプロテスタントからの反撃を煽る。彼らはロンサールの才能の衰え

を抽象的に指摘するだけでなく、「ロンサールは耳が聞こえず、病気であり、精神異常であるため、自分の支離滅裂な発言を反省しなければならない」と強調した³⁷⁾。度を越した誹謗中傷だが、宮廷詩人という公人の立場にあるロンサールはこれに立ち向かう義務もあった。

コンデ公の率いるプロテスタントに包囲されたパリで執筆されたという『フランス国民への訓戒』の冒頭で、国民ではなく神へまず訴えるという手法は許容されても、カトリック詩人が持ち出した「神」は、驚きを与える。

おお空よ、おお海よ、おお大地よ、おお共通の神よ、
キリスト教徒の、ユダヤ人の、トルコ人の、そして各自の神³⁸⁾、

この「神」はもはやキリスト教の神ではないのは自明である。ロンサールは問う。

しかし、隣人キリスト教徒の誤謬を見て、
どこのトルコ人、ユダヤ人、サラセン人が
洗礼を望むのでしょうか³⁹⁾。

キリスト教への絶望のようにも響く。まるで20代の詩作に戻ったように、宗教戦争の只中で異教的な神々（バッカス、ネプテューン、パーン等々）を讃えてみせるが、40行後には覆すように断言する。

しかし、救い主イエス・キリストの福音書は
私の心に確固とした信仰を刻み込みましたから、
いとも残酷な死を耐えなければならないとしても
他の新しい信仰に変える気はありません⁴⁰⁾。

キリスト教の立場であることを明言し、人々に忠告を与える。

自然現象を論ずるのは良い、
雷、風、雪や雹のことだ、
でも、疑ってはならない信仰を論じてはなりません、
ひたすら信じるべきで、論じるべきではありません⁴¹⁾。

「ひたすら信じるべき」というこの態度は、先ほどの「一つの口となって祈れ」のカルヴァンや信仰者ルターに共通する響きもある。その一方でイデオロギーや政治思想を擬人化した恐ろしい「オピニオン」の歯牙にかかったのがルターであり、フランスの混乱の源であることを十二分に歌い、「息子が父に、妻が夫に、兄弟同士が、叔父が甥に」戦争を仕掛けるに至ったと歌う⁴²⁾。躍動感があり表現に詩的な面白味を失わず、韻律の乱れもなく、この840行を超える詩句は、詩人の混乱というよりは、詩人を取り巻くフランスの混乱、ヨーロッパの混乱を悲痛に伝えてくれるようである。確かに新教徒からの度重なる攻撃をかわす目的もあったが、もっと大きな規模で国を憂える詩と読める。新教のあらゆる宗派の存在を苦々しく思うだけでなく、ロンサールの本心は宗教さえも面倒に思ったのか。こんな風に歌う。

宗教やキリスト教の信仰が
こんな実り方をするならば、私はそこから離れたい。
追放されて、インドに行って暮らしたい、
あるいは未開の人が日々生活し、
幸せに自然の法則に従っている南の果てへ⁴³⁾。

インドや南の果ては当時の大航海時代の遺産である。カトリックの一部がヨーロッパを離れて宣教師となり、日本にもカトリック（イエズス会）が入ったのはこの時代である。詩人の視野は広い。国内で宗教戦争に巻き込まれることなく、海外に向かう聖職者たちの存在を意識したのか。ロンサールがもう少し若ければ軍職を求めた頃のように海外に出たのかもしれないが、国内においてはユグノーから自分の修道院を守る必要もあった。ロンサールの「ユグノー嫌い」はこんな風である。

高貴な心がユグノーの騙しに遭って
この毒に死ぬまで支配され、
とても快活な人がその信仰を捨てるのを見るのは
辛く苦しいものです⁴⁴⁾。

カトリック側のロンサールは、カトリック教義を具に論じることもプロテスタントとの教義的な差異を語ることもない。ただ宗教戦争に巻き込まれ自身の身が危ない時でさえ、友人仲間が引き裂かれ国が分かれていくことを嘆く。しかし詩人は嘆くだけではなかった。戦争を引き起こした犯人を見抜く神に、作品の最後で生々しく祈った。

春の草が野の間で新しい花を開かせる、
その時よりもどうぞ早く、神よ、
この戦いの災禍を作った主犯を滅ぼし給え、
胴鎧を貫通する槍あるいは鉛の球を喰らわせて絶命させ給え⁴⁵⁾。

V 友愛——リヴォドーとロンサール

エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ (Etienne de La Boétie, 1530-1563) は『自発

的隷従論 (*Discours de la servitude volontaire*)』の冒頭で、「ひとりの主君に服従することは、不幸の極みである。その者が善人であるという保証は全くないからだ」と説き、宗教心の悪用を掲げた⁴⁶⁾。「圧政者たちは、人々の宗教心につけ込んで身を守ろうとし、あわよくば、自分の邪悪な生活を維持するために、神聖のちょっとした片鱗でも拝借したいと考えた」と言う。だがフランス王だけは例外的に圧政者の仲間入りを免れていると言うのがボエシの意見で、その理由が詩人たちの存在なのである。

ボエシがこの論考を書いた時期は正確には分かっていないが、友人モンテーニュによれば1540年代というから、かなり若い時期の記述であることは確からしい⁴⁷⁾。ロンサールはまだ宮廷詩人になっておらず、リヴオドーも子供である。だがボエシの論考には、ロンサールの『フランシアード』という題名が明示され、それに期待を込めている。本稿の最初で取り上げたバビノーが1550年代に『クリスティアード』と詩集を名付けた時点で、ロンサールを意識した可能性はさらに高まるが、残念なことにボエシは1563年にはこの世を去るので、1572年の『フランシアード』出版を見ることはない。それどころか宗教戦争下の詩人たちの敵対さえ十分に知ることはなかった。ただ、彼らへの期待が残された。

フランスの詩は今や、われらがロンサール、我らがバイフ、我らがデュ・ベレーによって相貌を一新したように思われる。(中略)わが国の歴史の真実性について、まるで決闘でもするかのように激しく争いたくはないし、些細なことまでいちいち詮索したくもない。そんなことをすれば、われらがフランスの詩人たちが自己を研鑽するための格好の素材を失ってしまうことになりかねないからだ。(中略)私は彼(ロンサール)の力量を理解しているし、彼の繊細な精神を知っているし、その優雅さをわかっている。だから我らの詩人の畑に好き勝手に足を

踏み入れたりするのは、不遜の極みなのである⁴⁸⁾。

「勝手に足を踏み入れたりするのは、不遜の極み」は、先述のリヴォドーがロンサールを喩えた「聖なる泉」の守り手的な表現にも似ている。ポエシの論考は当時の証言として重要である。

リヴォドーに戻ろう。おそらくこの論考が書かれた頃、幼少のリヴォドーは、詩人ロンサールを純粹に愛でていたという告白を後にしている。

もっともおやかな子供時代から、
僕の本性はフランスの詩人たち、
とりわけロンサールの驚異的な素晴らしさを称賛してきた、
詩のプリンス、妬みもなく自らの詩流の第一人者として⁴⁹⁾。

ロンサールを子供時代から知り、詩王の素晴らしさも讃えたという告白である。だが、ポエシさながらにロンサールを汚した人たちを「芸術家気取りの驕り高ぶった奴ら、ホラ吹きของソフィスト達、彼らは大胆で、無謀な嘘つき」とするまでには時間を要した。

1560年前後のリヴォドーの攻撃的な様がクローズアップされて語られことは多いが、全体の流れを眺めると、そこには常に作品への言及がある。「讃歌では完璧な詩人のロンサール」と評価したように、常に批判の中に作品評価を入れる。『恋愛詩 Les Amours』の評価は低いが、「讃歌」の評価は高いのである⁵⁰⁾。時には軽蔑した「ピンダロス風オード」が、「この壮大な韻律、充実した詩、ピンダロス風オード……」と称賛に変化する。少なくともリヴォドーの実名の作品では、批判は作品評価に基づいている。そこには宗教の違いに左右されない、純粹な作品評があるようである。最終的にリヴォドーは自分を省みて「天分と芸術性は僕にはほとんど無いけれ

ど、ロンサールの美德は分かる」と謙虚に吐露した⁵¹⁾。「ピンダロスやホメロスを私は少しばかり理解している」と言うリヴォドーは、ギリシアのストア派『エピクレトスの提要』の翻訳を最後に仕上げた⁵²⁾。エピクレトスの哲学に取り組む時間がリヴォドーを小賢しい詩人のままにできなかったことも確かであろう。

おわりに

本稿はリヴォドーを中心にバビノーやロンサールあるいはリヴォドーの父の詩作を通して寛容と非寛容の問題を詩人の友愛と敵対に置き換えて考察してみた。ロンサールの部分がいささか重くなったが、それだけ重要な詩人であり、リヴォドーに強い影響を与え続けたと言うことで、ご理解を願う。

ごく単純に置き換えてしまえば、リヴォドーとバビノーの間には友愛が、バビノーとロンサールの間には敵対が、父リヴォドーとロンサールの間には友愛が、あったとなるだろう。もちろん詩の表現から読み取れる範囲である。そしてリヴォドーとロンサールの間は、友愛が敵対になりさらに友愛となった、と言えるかもしれない。

友 *ami* が敵 *ennemi* になり、さらに *ennemi* が *ami* になるということがあるのか。ラテン語の語源を持ち出せば *in + amicus = inimicus* であり、「敵」(の語源)は「友」であり敵の中にはいつも友が隠れている。まさにリヴォドーのロンサールへの意識である。最初に *ami* があって *ennemi* になっても、そこにはいつも *ami* が隠れていたように感じる。宗教戦争下でもリヴォドーにはロンサールへの友愛が通奏低音のように響き続けていた、と結論しておく。作品という証拠からの判断ではなく、父ロバールから息子への影響を考慮した、いわば状況証拠からの結論である。匿名作品の問題もあるので続きは次回に譲りたい。

16世紀の宗教戦争を通して詩人たちの友愛や敵対は、為政者の宗教的な寛容、非寛容にも大きく左右された。戦争では各自の立場と各自の思いが強引に切り離されることもある。宗教戦争がなければ、詩人たちの敵対はなかったのか、違う形になったのか、と余分な疑問も頭に浮んだ。

(ウクライナとロシアに思いを馳せる2022年2月末日)

註

- 1) Andre de Rivaudeau à Honorast Prevost, gentilhomme poitevin in *La Christiade d'Albert Babinot, Poitevin, A Poitiers, pour Pierre et Jan Moines frères*, 1559, p. 7.
- 2) *Idem.*
- 3) ロンサールの『遊楽集』(*Folastries*, 1553)には半ば直接的な性(器)の描写や遠慮のないスカトロジックな表現がある。リヴォドーは奔放で放逸な表現を不埒だと捉えたのかもしれない。特に若い世代への影響を心配している。なおレトリックは秀悦で屈託ない明るさがあるこの作品集は、ルネサンス期の大らかな表現の一例、古典を踏まえた見事な作品集としての今日では捉えられている。
- 4) Andre de Rivaudeau, *op.cit.*, p. 8-9.
- 5) *Ibid.*, p.14.
- 6) *Ibid.*, p.12.
- 7) *Ibid.*, p.15.
- 8) アルベール・バビノーについてよく知られていない。幾つかの断片的な資料によると、バビノーはボワチエ大学でローマ法を教える講師(Lecteur)の立場であり、同時にカルヴァン派のフランスにおける有力な布教者と記載されている。過激な行動に若者を導くフランスでの異端の工作員のように記される場合もあるが、それはおそらく彼の移動が頻繁で、カルヴァンとも接触が多く、ある時期を境に姿をくramsすように歴史から消えてしまっているためでもあると思われる。cf. N. W. « La Christiade d'Albert Babinot » dans *Bulletin historique et littéraire* (Société de l'Histoire du Protestantisme Français), Vol. 37, No. 2 (15 Février 1888), p. 112.
- 9) 「喜びについて」というソネット。日本語訳について—以下、特に指摘のないものは筆者の試訳であり、原則として全訳の場合は原文を注に掲載した。

- 10) Albert Babinot, « De son Plaisir » dans *La Christiade d'Albert Babinot* (以下, 「/」はソネットの改行を示す): Le chaud qu'on sent au plus fort de l'été / Ne nous rend tant la fraîcheur agréable, / Et des forêts l'épaisseur délectable / N'a onc si bien le passant arrêté, / Et à celui qui se trouve endetté / L'or ne plaît tant, ni au captif coupable / Rémission d'un pêché punissable, / Ni à un serf la douce liberté, / Comme d'écrire à ma suiveuse main / L'indigne lot de mon Dieu souverain / Autre sujet mon saint style n'amuse. / Autres discours en moy ne verras point, / Mon Rivaudeau, autre amour ne me point, / Autre que Luy ne veut chanter ma Muse.
- 11) *La Christiade d'Albert Babinot*, cité par Keith Cameron, « Introduction » dans *Aman*, éd. et commenté par Keith Cameron, Droz, 1969, p. 14.
- 12) Albert Babinot, *Aux Muses sur les saintes œuvres d'Andre de Rivaudeau* in Andre de Rivaudeau, *op. cit.*, 1566, p. 1.
- 13) Andre de Rivaudeau, « Epistre à Babinot poète chrestien » dans *Les Œuvres d'Andre de Rivaudeau Gentilhomme du Bas Poitou*, Poitiers, Nicolas Logeroys, 1566, p. 163-167.
- 14) Albert Babinot, « Ode d'A.Babinot de Potiers à Andre Rivaudeau sur sa version d'Epictete » dans *La traduction française du manuel d'Épictète d'Andre de Rivaudeau au XVIe siècle*, éd. par Léontine Zanta, 1914, p. 96-97.
- 15) *Remonstrance a la Royne mere du Roy sur le discours de Pierre de Ronsard des miseres de ce temps*. Nouvellement mis en lumiere. A Lyon. Par Francoys Le Clerc. 1563. この詩の半分以上を以下の論考が再録している。Jacques Pineaux, *La polémique protestante contre Ronsard*, Paris, 1973, p. 99-185.
- 16) *Remonstrance a la Royne, op.cit.* 1800行にわたる詩から抜粋。
- 17) *Ibid.* v. 949.
- 18) François Rouget, « Entre éloge et consolation: "Le triomphe de la constance chrestienne à Monseigneur le prince de Condé" (1565) » in *Bulletin de la Société de l'Histoire du Protestantisme Français* (1903-2015), Droz, 2012, Vol. 158, p. 509-530.
- 19) François Rouget, « Ronsard et ses adversaires protestants: une relation parodique » in *Seizième Siècle*, Droz, 2006, No. 2, p. 88.
- 20) Andre de Rivaudeau, « Epistre à Babinot poète chrestien » dans les œuvres d'Andre de Rivaudeau, éd. cit, v. 91-95.
- 21) 「レミー・ペローへの書簡詩」については、拙稿「リヴォドーという詩人—ペローの友人?—」中央大学仏語仏文学研究会編『仏語仏文学研究』2022年,

- 55-82頁。特に第二章「レミー・ペローの書簡詩を通して」が該当。
- 22) Andre de Rivaudeau, « Hymne de Marie Tiraqueau » dans *les œuvres d'Andre de Rivaudeau*, éd. cit., p. 142-155.
 - 23) 伝記について、Michel Dassonville (*Les Enfances Rosard*, Droz, 1968) と高田勇 (『ロンサール詩集』青土社, 1985年, p. 428-442), ロンサール博物館(トゥール)の資料(展示)を参照した。
 - 24) ロンサールが好んで人生の後半を過ごしたトゥールにあるサン＝コム修道院は、「ロンサールの家」として資料展示が充実している。筆者は1990年と2017年に頻繁に訪問したが、20世紀末と現在とでは展示方法も敷地の使い方も大きく変わった(特に礼拝堂を飾る現代芸術家によるステンドグラスは有名)。変わらないのは、敷地内の建築物とロンサール墓の配置ぐらいである。ポーソニエールというロンサール家の墓所と生家も、サン＝コムから自動車で1時間弱の場所。ロンサールの父母の眠るカトリックの教会、城のような生家は、現在も周囲を豊かな自然に囲まれて地域の心ある人たちによって管理され、ロンサールに関わるイベントも定期的に開催されている。
 - 25) Pierre de Ronsard, *Les quatre premiers livres des Odes de Pierre de Ronsard, Vandomois. Ensemble son Bocage*, Paris, Chez Guillaume Cavellart, 1550.『オード四部集』と略記。
 - 26) 巻頭詩(poème liminaire)については以下を参照した。Pierre de Ronsard, *Œuvres complètes II*, éd. Laumonier, Paris, Hachette, 1924, p. 213 : Muses & Dieus, la faveur variable / De vos efféts, a rendu admirable / Nostre Ronsard, surmontant les antiques : / Vous même en lui, vostre invincible effort / Avés vaincu, Ronsard est donc bien fort / Vainqueur des Dieus, des Muses, & Liriques.
 - 27) *L'architecture et art de bien bastir du Seigneur Leon Baptiste Albert*, Traduits de Latin en François par Jan Martin, Paris, Par Jaques Kerver, 1553.
 - 28) エミール＝G・レオナル『プロテスタントの歴史』渡辺信夫訳, 白水社, 1968年, 86-87頁。
 - 29) 引用は前掲書, 87頁による。
 - 30) 同上。
 - 31) Pierre de Ronsard, « Insitution pour l'adolescence du Roy treschestion Charles Neufvieme de ce nom », *Œuvres complètes XI*, éd. par Paul Laumonier, S. T. F. M., 1990, p. 3-13. v. 1-4. 題名は「いともキリスト教的なる王シャルル9世の青少年期のための教育」だが、「いともキリスト教的なるシャルル9世の教育」と略記した。

- 32) *Ibid.*, v. 119-126.
- 33) *Ibid.*, v. 115-118.
- 34) *Ibid.*, v. 134-144.
- 35) この詩のコンセプトは融和政策で知られるミシェル・ド・ロピタルだという説があるが、韻やリズムはロンサールの詩作と考えられる。
- 36) 1562年に詩作された3作は以下に掲載。Pierre de Ronsard *Œuvres complètes XI, op.cit.*
- 37) Jacques Pineaux, *op.cit.*, *La polémique protestante contre Ronsard*. さらに
 « Poésie et prophétisme: Ronsard et Théodore de Bèze dans la querelle des
 “Discours” » in *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 1978, No. 4, p. 531-540
 を参照。
- 38) Pierre de Ronsard, *Rmonstrance au peuple de France, op.cit.*, p. 63, v. 1-2.
- 39) *Ibid.*, v. 41-43.
- 40) *Ibid.*, v. 85-87.
- 41) *Ibid.*, v. 143-146.
- 42) *Ibid.*, v. 338-341.
- 43) *Ibid.*, v. 352-356.
- 44) *Ibid.*, v. 589-592.
- 45) *Ibid.*, v. 830-835.
- 46) *Discours de la servitude volontaire* については以下を参照した：エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ『自発的隷従論』山上浩嗣訳、筑摩書房、2015年。
- 47) *Idem.*
- 48) 前掲書、63頁。
- 49) André de Rivaudeau, « Epistre à Remy Belleau » dans les œuvres d'Andre de Rivaudeau, éd. citée., 1566, « Belleau, mon naturel, dès ma plus tendre enfance / M'a fait admirateur des Poètes de France, / Et singulierement du merveilleux Ronsard, / Le Prince, sans envie, & premier de son art. », p. 158.
- 50) *Ibid.* « Ronsard, à mon advis, a bien suivi le train / Des meilleurs anciens, & touché dans leur main. / Car Poète parfait aux Hymnes il decœuvre / Une encyclopædie & en mainte sienne œuvre, / Et fait nostre langage en un stile nouveau / Passer des anciens le langage plus beau.», p. 160.
- 51) *Ibid.* p. 160-161.
- 52) *Ibid.* « J'enten, peut estre, un peu de Pindare & d'Homere, », p. 161.

